

ギーを指し示すが (I, 3; II, 8), それはいわば ‘corpus veritatis’ の装いと輝きを持つのだ、と言っている。思うに、テュポロジーは Historie ではないが, factum としての身体性を持ち, その美は死を含む美として, 生死の対比に最もよく現れるというのが, 彼の気持だったのだろう。

**結び** 以上アンセルムスの三つの著作を取り上げ, mono, pros, dia の指標を手がかりに intellectus fidei の構造と道筋とを若干考えて見た。たしかにここでは, 不変的存在と可変的存在の区別や, イデア的存在理解や, 絶対的な超越としての神というプラトニズムの思想は, 構造論的にはもう存続し得ないと思う。分有についても, 「多くの善いものが, ある一つのものによって (per) 善い」(*Monol.* 1) とか, 「すべての真なるものは真そのものによって (per) 真である」(*De verit.* 2) という場合の ‘per’ は存在論的分有や認識論的分有 (ideae innatae) を意味するのではなく, ただ論理的命題を構成するものとしてだけ用いられている。

まだ考えの足らぬ所は多々あるが, 私としてはシュミットのテーゼを内容から見ても強く支持したい。アンセルムスの神学は深い意味においてプラトニズムから自由なのである。フラッシュへの反論は他の機会にゆずるが, これについてはアウグスティヌスのプラトニズムと呼ばれるものの実体を再検討しなければなるまい。それは従来少しく安易に言われていたのではないかとの危惧がなきにしもあらずである。

---

## 提題 トマス・アキナスにおけるプラトニズム

クラウス・リーゼンフーバー

トマスの思想における (新)プラトンの基本構造は, 彼の主としてアリストテレス的な用語や, アリストテレスの『形而上学』(第一巻) から受けついでプラトンのイデア説批判の勳象のために, 長い間研究者にはかくされたままであった。しかしながらそのプラトンの要素は, 多様な形態と複合的な媒介を経て, 例えばアリス

トテレス自身や、アウグスティヌス、ボエティウス、更にまた『原因論』(*Liber de Causis*)、アヴィケンナ、アヴィケブロン、とりわけまた偽ディオニシウス・アレオパギタなどを通じて、トマスに及んでいたのである。従って方法としては、トマスにおけるプラトンの構造は、プラトン自身と直接比較することによって明らかにされることはできない。またトマスが(新)プラトンの用語を保っている箇所でも、彼はそれを独自の仕方解釈しているため、トマスのプラトニズムは、彼の用いた新プラトン主義的な表現から新プラトン主義と同一の概念内容へと単純にさかのぼって推論することで解明されることはできないのである。むしろトマスの作品を新プラトン主義的伝統の背景を念頭において分析し、彼がその底流において打出したプラトンの思想の形態を発見しなければならない。この限られた要約の中では、善(*bonum*)の概念と関連しているトマスの分有(*participatio*)の概念のプラトニ的な構造を指摘することに限定しよう。

## 1. 分有と善の概念

トマスは分有の概念を、後期の作品ではますます頻繁に、多様な関係の特徴付けるのに用いている。例えば個物の種に対する関係、または意志や感性の知性に対する関係、知性の永久的真理の理念に対する関係などと共に、一般に被造物の神に対する関係が分有と名付けられている。つまり分有という概念は、ある構造の形式を、すなわちある限定された完全性をもったものの、この完全性が本質的にまた無限定に帰属するものに対する関係を表わしているのである。このような関係は基礎付けの関係である。なぜなら限定された完全性は、本質的に、従って恒常的に、限定されない本来の姿で実現されている完全性に依存しているからである。有限的な完全性が限定されない形でのこのような完全性そのものに関わっている限り、この依存関係は一方的であるためにその関係を越えて無限定の完全性が他に依存しない自立的存在であることを指し示している。従って分有の概念は、有限なものの本質的な依存性と、この依存関係に対する根拠の本質的な超越性ととの構造的な統一性を表わしている。この構造の概念的分析においてトマスは、類似性とか現実態と可能態との合成といったような、相互補足的な様々な概念を用いて、分有の中に含まれている基礎付けの関係を、アリストテレス的な原因論によって更に詳細に規定しようと

努めている。

ところで、それ自体としては形式的な分有という概念は、善の概念を通じてその内容的な充実と基礎付けを得るようになる。例えばトマスのいくつかのテキストにおいて、この二つの概念が際立ってしばしば互いに結びついているのが見出される。「善」は欲求との相関性において説明され尽くすものではなく、何よりも先ず、それ自身善いもので、この意味では絶対的に善いもの、従って完全なものを意味している。それはまさに、それ自身で善いものであるからこそ、伝えられ、欲求されるのであり、従って依存関係を基礎付けるものである。このようにしてこの善は根源として示され、この根源はそれから基礎付けられるものに依存せずにそれに先立っていて、優越していると同時に、基礎付けられたものに対して本質的な差異がありながらも、それをその固有な存在において自分の方に惹きつけ、自分と一致させるものである。そこで伝達と欲求されることの原理としての善の性格から、分有の構造が浮きぼりにされてくる。以下において、この分有の構造を、神と被造物との関係において論じてみよう。

## 2. 神の名称としての超越論的概念

有限なものの分有的構造は、それ自身で存立する純粋な完全性である第一原理すなわち神を指示している。従って存在、一、真、善などの存在論的な基本概念は、抽象的な一般性の形ですべての存在者を表わしているばかりではなく、それらは有限なものの媒介を通して認識されるものではあるけれども、根源的には神の名称として用いられている。この新プラトン主義的な意味では、神は有限なもののあらゆる多様性の中で前提されている一者として、あるいは第一の真理として認識されるのである。

トマスの存在概念と、それ自身で存立する存在としての神理解は、歴史的には先例のないものであるが、それはトマスによって、新プラトン主義的な諸原理から展開されたものである。それによれば、存在は最も普遍的な結果であるから、その根源的な内容から言えば、それは最も単純で、完全なものであり、存在者の最も中核をなすものであって、従って直接に第一原因から由来するものである。だが例えば『原因論』では、存在は被造物の第一のものであって、従って一者や善が根源とし

てそれに先行しているのに対し、トマスにとっては、「存在」は相関性のない自立性として依存関係を根拠づける善に先行する。それにも拘わらず、存在はそれ自身ですでに限定されない充足性と完全性であり、同時に純粋な分有される可能性を意味しているという理由で、存在はそれ自体として純粋な善性なのである。

更にトマスが神を善そのもの、純粋な善性、あるいは本質的善などと名付ける時、彼はこの点でプラトンに賛同している。というのは、アリストテレスは善に、ただ概念における類比的な統一性しか承認せず、実在的な統一性を認めていないのに対して、プラトンにとって善は、あらゆる善いものの中で究極的には一つのものである。そこで有限な善は、ただ最高善の分有と類似としてのみその固有な善性を有することになり、最高善は有限なものにおいて現われて、その善性そのものに基礎を与えているのである。

### 3. 神に向かう有限なものの欲求

すべての有限なものは、神との関わりの中でその善性を有するのであるから、神はすべての存在するものにとって共通の善である。たしかにアリストテレスが言うように、どの存在者もその本性に従って、その内的な自己完成を目指している。だがまさにこの自己完成こそが、トマスがプラトンの意味で強調しているように、善そのものの分有という仕方欲求されているのである。というのは、有限な存在者を超えた純粋な善に対する愛に動かされて、有限なものはその固有な善を肯定し、同時にこの純粋な善に似ようと努めるからである。だが有限なものは、それが目的因である神から惹きつけられているからこそ、神の善性に向かって自己を開き、そこに超越するのである。つまり有限なものの欲求は、根本的には神から発するのであるから、有限者は単にそれに固有な善よりも、それを超越した共通な善をより多く愛することになる。それ故神が神的であるということは、まさに神がその純粋な善性によって、超越論的に被造物にとってもその欲求の根源であり、中心であり、目的であるという点で、はじめて完全な形で判明するのである。

トマスは、自己愛と神の愛との統一性を、神の存在の類似性を分有する有限者の本質形相から扱っている。有限なものがその存在という点で、超越的な原型である神に関わりをもつ限りで、被造物そのものの存在の中に、神との差異と関わりが関

示されている。このことによって神との類似性としての本質が、欲求し行為しながら神に類似しようとする活動の根源となるのである。範型因的に特徴付けられたこの本質形相は、こうして有限なものに内在する核心であり、この核心において神を根源とする有限者の関わりは、愛による神への回帰に転ずるのである。しかしながら、範型因による根源と目的との、従ってまた作用因と目的因との存在論的なこの統一は、有限的精神が自分を神の似姿として理解し、実現している限りで、有限的精神においてはじめてはっきりと成就されるのである。

どんな有限なものでも、純粋な善の分有によって、全てに共通な善に向かって自分自身を越え出るのであるから、分有は、すべての有限者相互間の共感的な共同性の根源や場となる。従ってこの共通の根源に対する欲求の関わりに融和し、分有の諸段階としての本質の等級の連続性の中で互いに触れ合い、愛によって相互に補充し合う傾向をもつようになるのである。新プラトン主義に統合された、世界の秩序と美というストア的な思想は、分有における超越者との関係からその基礎付けをえているのである。

#### 4. 分有としての創造

新プラトン主義は、分有の思想の中で、有限なものをその質料性を含めたあらゆる次元に関してそれを一つの絶対的な第一原理に由来するものとして理解しようと努めた。新プラトンの考えでは、有限なものは善の自己伝達に負うことになるから、トマスは分有の概念を受け継ぎ、変形することによって、創造を存在論的には、自由に自分を伝達する神の善意の働きとして理解するようになった。このように、有限なものの本質に対する神の範型因という考えが、すでに善性そのものに基いている。というのは、神の善性が有限なもののアイデアを構想し、これを創造によって現実化しているからである。トマスは、善が自己をあふれるほどに伝達し多様化するという新プラトン主義の原理を継承したが、この伝達を目的因的に把握して、更にこの伝達が、自由な作用因によって、実現されるものであるとした。新プラトン主義的な原理は、これによって有限なものの基礎付けという問題においてその主要な位置を保つことになったが、それは二重の意味で変形されている。というのは、目的因の主導的な機能によって、創造の業における神の自由が明確に提示されたと

共に、それに相当する作用因の役割から、有限なものが直接神から贈られた存在において自立しているという点が強調されたからである。それ故にトマスは、分有の構造の中に自由な作用因の思想を導入することによって、また被造物によって分有された存在と神の存在を区別することによって、神と被造物との差異を明確にしたのである。トマスがこうして分有の関係の中で、神と被造物との相互の自由な出会いの場を切り開いているとすれば、彼は被造物を、啓示における神の自由な自己伝達のための前提および可能な受け手として考えていたのであろう。(本間英世訳)

---

## 質問 I

松 永 雄 二

お二人のきわめてすぐれた発表によって、「中世哲学とプラトニズム」というテーマは、もはや討論がその中で行なわれる外的な枠組ではなく、むしろ真正の哲学的思索がそこから出発する内的な地平を照らすものとなった。以下のそのことへの讃辞をこめて、事柄そのものの解明のために或るひとつの問題点を取上げさせていただきたい。それはプラトンの哲学に始まる「分有」という問題を如何に解するかにある。

K・リーゼンフーバー氏は、この問題を、何よりもまず無制約的な善そのものとわれわれの自己の存在の関わりという面から問われたように思われる。すなわち、善そのものの超越は自己の行為と存在の開けを可能にするものであり、そこに現われる自己であることの問題性の地平こそが、まさに「分有」という構造の基幹をなす問題場面にほかならないことを指摘された。これはイデア論の存立にかかわる重要な示唆であり、すなわちイデア論とは、ほかでもなくわれわれが、自己および世界に対する自然的把握のうちには、究極的に——そしてむしろ原初的に——決して止まり得ないことの意味としてあることを、示唆されたように思われる。

これに対して、泉氏は、不変なるものと可変的なものという二元的構図がややもすれば陥り易い罫、すなわち可変的なものは、存在と無の中間者としての存在領域